
ココロ曇り空

香弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロ曇り空

【Nコード】

N7091N

【作者名】

香弥

【あらすじ】

雲雀恭弥。

並盛風紀委員長で、並盛町の不良の頂点に君臨する最強最悪の少年人と群れることが嫌いで、群れるやつがいると仕込みトンファーで滅多打ちにするという。

そんな雲雀と群れることが出来る人間が

一人もいない“はずだった”。

だが、たった一人だけ雲雀と群れることのできる人間。

雲雀蓮弥。

並盛町で雲雀以外誰も知らない。

雲雀恭弥の双子の弟――。

原作にもとづいているところもあれば、オリジナルストーリーが入っている部分もありますので、『原作通りじゃないや嫌だ!!』という人は、ご遠慮ください。

最強の双子の弟

黒い雲がでている夜。

1人のメガネをかけた少年と集団の不良がいた。

「おい、金出せよ!!」

不良達は少年を脅し金をとろうとしている。

「うう・・・、うう・・・」

だが、少年は震えており、

金を出す動作が出来なかった。

1人の不良が腹が立ち、少年を殴った。

それと同時にメガネが割れ地面に落ちる。

少年の震えは止まり態度が変わった。

「君達、僕のメガネを壊したよね。」

黒いオーラを出し、不良達を睨みつける。

「ああ？メガネ壊したぐらいなんだってんだよ!!」

「お、おい!!こいつは・・・!!」

不良達の様子が変わり、怯え始める。
そして一斉に叫ぶ。

「雲雀恭弥だああああ！！」

その少年はクスリと笑う。

「違うよ、似ているけどね。でも君達みたいな草食動物に僕の名前を教えるわけないでしょ？」

少年は隠し持っていたトンファーを取り出す。

雲雀恭弥じゃないと言われても、その姿は雲雀恭弥そのものだった。
不良達はその場から遠くに行こうと逃げ出す。

「逃がさないよ。」

少年は次々と不良を倒していく。

倒し終え、まだ息のある不良に話しかける。

「もしこのことを他のばらしてみなよ。今度は本当に殺してあげるよ。」

不良は顔を青くし、コクリとうなずくしかなかった。
予備のメガネをかけ、その場から静かに消えた。

学校の日常

学校では、その話の噂が流れていた。
グループをつくり、ザワザワと話し出す。

「おい、不良20人ほど路地に倒れていたんだってよ!」

「えっ?それって雲雀さんじゃないの?」

「何か違うらしいぜ?」

「誰なの?誰なの!?」

「それが覚えていないんだってよ!」

「んー?誰だろ・・・?」

絶対違うだろう、という名前を出したり、不良との漬しあいじゃないか、という人もいた。

人それぞれ自分の意見を出し合いながら語っていた。

「なあ、佐藤!誰だろうな!」

みんなと離れて、一人だけ椅子に座っている佐藤というメガネの少年に話しかけた。

全員そちらに向き始める。

その子も、急にふられてふられて戸惑っていた。

「えっ・・・、んー誰だろう・・・。」

「実はお前だつたりしてな！」
「ち、違うよ。」

困った表情になりながら、その話を止めようとしている。
クラスみんなはこんなやりとりを見て、笑っていた。
コレがいつもの日常。

そんな話が学校に来ると必ずある。
でも、クラスの人達は知らない。
クラスの中にその人物がいることを

――。

双子の生活

「ああゝ、疲れたあゝ。」

ボフツとソファーに倒れこむ少年。

この少年こそが、雲雀恭弥の双子の弟『雲雀蓮弥』
学校では、佐藤蓮弥と名乗っている。

兄のことがあり雲雀とは名乗らないらしい。

学校でメガネをかけているのも、キャラ作りも同じ理由。

「こう毎日毎日あの話ばっか……。嫌だな……。はあー。」

クラスでも嫌われているわけでもなく、逆にいうと気に入られて
いるのが正しいような……。

僕が夜に出来事を起こすといつもコレだ。

どんなに口止めしようとダメなんだよなあ……。

頭の中で考え事して、少しずつ時間が過ぎていく。

「あつ、夕御飯作らなくちゃ。」

急いでキッチンのほうに向かった。

慣れた手付きで調理する。

あつと驚くような速さと、綺麗さに料理は完成する。

普通の主婦より上手いんじゃないか？というくらいの違い。

丁寧皿に盛り付けていく。

「もう、そろそろ帰ってくるかな。」

予想通り、扉の開く音が聞こえてきた。
僕は、玄関の方まで歩く。

「兄さん、おかえり。」

兄さん。そう雲雀恭弥が帰ってきたのである。

「ただいま、蓮。」

兄さんは少し微笑み、家の中に入る。

一様血の繋がっている家族だから一緒に暮らしている。

このことを並盛町の一人にでも知られたら、大パニックが起こるだろう。

僕はすごい人物として見られる。

別に見られようがどっちでもいいけど、迷惑になるのは嫌だな。

二人はテーブルの椅子に座った。

「いただきます。」

「……ます。」

僕は手を合わせ食べ始めた。

「蓮の作った料理おいしいよ。」

兄さんはいつもおいしいっていつてくれる。

感想を言ってくれると一生懸命作ったかいがあっただな、って嬉しくなる。

「ありがと！でも、兄さんの作った料理のほうおいしいよ。」

ニコツと笑うと、照れてそっぽを向いた。

小さくありがとって動かしているのがわかった。
数分後。

僕達は食べ終わり、食器洗いを始める。

「ありがとう。」

「えっ！！何が？」

兄さんが急にお礼を言うので驚いて聞き返してしまった。

「いつも、疲れているのに家事全てやってくれて……。ごめん。」

申し訳なさそうに言う。

その姿には吃驚していまう時もあるけど、

学校とは違う家でしか、自分だけにしか見せない感情が嬉しかった。

「大丈夫だよ。兄さんの方が風紀委員の仕事で疲れているでしょ？
兄さんは明日に備えてゆつくり休んでいてよ！」

明るく微笑んだ。

兄さんも、少し微笑んで部屋を出て行った。

泡だらけの食器を洗い流し終え、ソファーに座りテレビをつけた。
寝かかった時に兄さんがお風呂から上がった。

兄さんに起こされ、お風呂に入った。

さっきまで、冷え切っていたのでちょうどいい感じだった。

「はあー、気持ちいいなあ・・・。」

憂鬱な気持ちも、全部洗い流してくれるような気がする。

「明日も幸せでありますように。」

小さくつぶやいた。

嬉しそうな表情をしながら・・・。

兄の発病

「兄さん、朝御飯できたよ。」

僕は階段の下から兄さんの部屋に届く声を出す。
いつもなら下りる足音がしてくる。はずなのに、下りてこない。

「どうしたのかな・・・。」

心配になって、階段を上り始める。
部屋の前に着き、ノックをする前に深呼吸をする。
ちよつと静かにたたく。

「兄さん、入るよ。」

少し鈍い音がしながら、兄さんの部屋に入る。
電気をつけていなかったのか、辺りが暗かった。
兄さんに申し訳なかったが、電気をつける。

「蓮？」

辺りが明るくなつて、気づいて僕の名前を呼んだ。
腰を起こして眠たそうにあくびをする。

「兄さん、早く学校に行かないと。」

「わかつているよ。」

そう言い、ベットから下りる。

だが、動きがフラフラで壁に凭れ掛かる。

息が乱れていて、苦しそうだった。

僕は心配になり、兄さんの側に寄る。

顔がさらに赤くなつていて、通常の状態ではなかった。

「兄さん？」

自分の手を兄さんの頬に当てる。結構なほど、熱くなっていた。

「あつっ！兄さん、まさか熱が出たの！？」

「僕が、熱が出るわけ……。」

言い終える前に僕のほうに倒れた。

落とさないようにしっかりと支え、ベットに乗せる。

急いでキッチンに行き、おかゆの準備をする。

「ごめんね、蓮。」

「いいよ、兄さんが無事ならそれでいいから。」

さつき作ってきたおかゆをスプーンですくい、兄さんの口にまで運ぶ。

パクツつと普通に食べてくれた。

最初のほうは、拒否られていたんだけどね・・・。

「学校、どうする？もう、七時だけど・・・。」

「そんなに時間が経ったの。」

「う、うん・・・。」

「早く行かないと・・・。」

無理に体を起こし、起き上がろうとする。
それを阻止するために止める。

「待つてよ！今、行くのは！！」

「でも、学校が心配だよ。」

兄さん、こんな時にでも学校って・・・。

まあ、それが兄さんなんだけど。

僕は思い切ってこんな時よの、"提案？を出す。

「兄さんで、良ければなんだけど・・・。」

「何？」

「僕達入れ替わる？」

「僕はいいよ。でも、蓮が心配だよ。僕の仕事とか、できる？」

「大丈夫、いつも見てきたから！」

「・・・、わかった。」

不安そうにしながらも、返事をする。

「でも、無理はしないでね。」

「うん！大丈夫だよ！！」

さっそく兄さんの予備の制服に着替えていった――。

弟と赤ん坊

青い空が広がる中、歩いて数分。

学校の校門前にまで来た。

生徒達が恐れ、僕を避けるように学校の中に入り込む。

「おはようございます。委員長。」

ズラツと黒い学ランを纏ったリーゼント頭をおろす。

尊敬と恐怖の思いで立っている人ら。

やっぱり凄いよ・・・兄さん。

中身は雲雀恭弥ではなく、弟の蓮弥である。

ここまでに来るまでどれだけ心配されたか・・・。

無理ならやらなくてもいいとか、草壁に任せればいいとか。

草壁さんが可哀相・・・。草壁さんは一様風紀副委員長。

そのまま応接室に行こうとしたときに草壁に止められる。

「あの・・・何で遅れたのでしょうか・・・？」

体が震えながら、質問した。

普通はそうだよ。正直だよ。

僕を怒らせたくないけど、気になるものはしかたがないよ。うん。

でも、兄さんの場合。

「君が僕に質問する権利があるの？」

横目で草壁を睨みつける。

トンファーを学ランの影から出す。

「す、すみませんでした!!」

まっすぐに背中を伸ばし、深く頭を下げる。

なんかごめん。草壁さんごめん……。

草壁の行動を無視して、学校に入ることになった。

「はぁ……。」

風紀委員の仕事を着々と進めているが、量が半端なく多い。

兄さんとやっていた時とは、3倍以上ある。

毎日こんなにやっていたんだな……。

すると一つのノック音が聞こえた。

「誰？」

「さ、沢田綱吉です!!」

……沢田綱吉？

えっと……誰だっけ？

「入れば？」

風紀委員に關することだと思い、返事をする。

応接室に来る事態が滅多にないからね。

入るのをためらっていたが、少しずつ扉を開けていく。

「失礼します……。」

「で、何のようなの？」

単刀直入に尋ねる。

おどおどし始め、言うことを戸惑っている。

「さっさとしてくれない？仕事の邪魔だから。」

トンファーを取り出す。

すると、沢田の後ろから一人の赤ん坊が出てきた。

えっと、リボンだっけ。

あつ、そっか。沢田って、パンツ一つで応接室をめちゃめちゃにした奴か……。

「よっ、雲雀。」

「へえ、君か……。何のよう？」

「ツナが遅刻したからな。思う存分楽しんでいいぞ！」

わお、兄さんが喜びそうな言葉。

「へえ．．．、いいのかい？」

「ああ。」

「ちょ、勝手に決めるな！！」

完全にビビッている。

えっ．．．、応接室を壊したのってこいつだよね．．．？

「じゃあ、遠慮なくやるよ。」

トンファーを取り出す。

人は見かけによらないって言うし、きっと強いんだよ！うん、うん。

―十分後だよ＊―

．．．はあ？

何、弱い．．．。

一発殴っただけなのに．．．、KO？

「イテテテテ．．．。」

「情けねえぞ！ダメツナが。」

横っ腹を強く蹴られた。

「いつてええ！！」

「煩いよ、咬み殺されたいの？」

「ひい！」

「今度、遅刻してきたらどうなるかわかっているよね？」

トンファーを沢田の首元近くにもっていく。
泡をふいて、気絶していた。

「ツナ、行くぞ！」

襟元を引っぱりズルズルと退場していく。
これで、仕事ができる・・・。
と思った矢先。

「じゃあな、雲雀の弟。」

・・・！！

なんで・・・。

僕のこと知っているの・・・！？

赤ん坊はニヤリと笑って、扉を閉めた。

弟と赤ん坊（後書き）

その頃、恭弥は・・・？

蓮弥に病院に行つてね。言われ、とりあえず行つた。

「ああ、佐藤君かい？今日はどうしたんだい？」

ニコニコ笑っている院長。

だが、その表情がイラつく。

ヘラヘラするな・・・、咬み殺したくなる・・・！！
攻撃するなつて蓮に止められているからしないけど・・・！！

「か・・・、風邪です・・・！」

怒りながらも、病状を言う。

「ハハハ、君が風邪ひくなんて珍しいね。」

笑い、笑い、笑い。

僕のことを笑う・・・？

殺す、殺す、殺す、殺す、殺す！！！！

次、病院に来るときに殺すことを決心したとさ*

双子の失態

なめちゃいけなかった・・・赤ん坊のこと。
兄さんが気に入るほどだから、すごい人だとは思っただけ。

” 「じゃあな、雲雀の弟。」 ？

一目見ただけでわかったのだろうか。

それとも僕の演技が足りなかったからか。
ともあれこれは僕の失態だ。

兄さんに迷惑をかける訳にいかない・・・。
ココロに不安が積もる。

トボトボ歩いていたら、自分の家に着いた。

「よう、雲雀。やっと帰ってきたか。」

「あの・・・。」

門前に赤ん坊と沢田がいた。

こ、こいつら・・・！！待ち伏せか！！
表情に出さないように怒りを抑えていた。

「僕の前で群れないでくれる？邪魔だよ。」

「お前の家に行ってみたくてな。」

ふざけている。

雲雀という名前の家を見ただけで、近寄りたくないと思うはずだ。なのに行ってみたいだと・・・？何を企んでいるの・・・、赤ん坊。

「赤ん坊でも迷惑だから。」

「実際には、ここに入っていた奴を見たから心配でな。大丈夫なのか？」

ま、まさか僕の格好をした兄さんを・・・！クソッ・・・だからここに来たのか・・・。

「どうした、雲雀。」

挑発するかのように笑いかける。

「別に。ささっと帰れば？」

「リ、リボーン、帰ろうよ・・・、ほらっ。」

「お前は黙っとけ。」

ゲシツという音をたて、地面に叩きつける。
沢田の顔は赤く膨れ上がっていた。

「心配だから、一緒に探してやる。」

僕を通り越して家の中に入る。

あの野郎・・・！！

兄さんに気に入られているからって、調子に乗りやがって・・・！！
そのあとを追いかけていく。

兄さんが見つかったら終わりだ・・・。

「中に入らないでくれる？迷惑だから。」

叫ばない程度の声を上げる。

「何か隠したいことでもあるのか？雲雀。」

また僕を笑いやがって・・・！！

「いい加減にしないと咬み殺すよ。」

トンファーを赤ん坊に向けて振りかざす。

だが、その攻撃はいとも簡単に受け止められる。

「いいんじゃないか？雲雀の弟としては。」

「意味わからないこと言わないでくれる？」

一度トンファーを離し、足蹴りをするがまた避けられてしまう。
小さい・・・、おまけに素早い・・・。

「どうした。終わりか？」

また挑発した笑いをしてくる。

なめやがって・・・、僕だって平凡に暮らしているわけじゃないんだからな！！

ガシャン

物が崩れる音が玄関から聞こえてきた。

まさか・・・兄さん！？

玄関前に走っていった。

「君・・・何やっているの？」

「すみません、雲雀さん!!」

あいつは今誰としゃべって・・・っ!!

「・・・ってあれ?なんで雲雀さんが・・・?」

なんで兄さんが・・・今外にいるの・・・?

家の中にいるはずなのに・・・?

しかも、買い物してきているし・・・。

僕の格好はしているけど・・・。

「何群れているの?てか、何入れさせているの?」

「いや、これには深いわけが・・・!!」

「よっ、雲雀。やっと帰ってきたか。」

玄関前にいつの間にか来ていた赤ん坊が兄さんに近づく。

「赤ん坊・・・何のよう?」

「お前の弟がどんなものか見たくてな。」

「言っている意味がわからないんだけど。」

「兄さん！早く入らないと！外の人に見つかったらやばいよ！！」

なるべく小さな声で兄さんに近づいた。

「認めたな、雲雀蓮弥。お前が、雲雀恭弥の弟だつて。」

何・・・だよ。

普通に強いつていう奴じゃないの・・・？

兄さんの方は、無言のまま赤ん坊の話を聞いていた。

「なんで、知っているの・・・。」

不安いっぱい聞いていた。

もう理性なんてもっていなかった。

「俺をなめるな。マフィアの情報網わからないと思っているのか？」

怒りという感情はもう全て消えていた。

怖いという感情が支配されていく。

「リ、リボーン！？何勝手にやっているんだよ！！」

沢田が慌てだし赤ん坊の話を止めにはいる。

「こいつもボンゴレのマフィアにさせるからな。」

不敵な笑みを見せる。

絶対やってやるという顔だ。

「また、そんなこと勝手に……。」

そんな話なんか耳には届かなかった。

もうなんでもいいから閉じこもりたい……!!

「赤ん坊、それだけは止めてくれる？」

僕の格好をした兄さんが話に入り込んだ。

滅多なことじゃないと他人の話に入り込まない兄さんが入ってきた。

「……もう帰ってくれる。」

兄さんは僕を両手で抱きしめる。

「兄さ・・・っ。」

「これ以上僕達の事情を探らないで。」

力強く抱きしめられる。

兄さんの表情を見ると目が鋭くなっていた。
赤ん坊は帽子のつばを下に向けた。

「じゃあな、雲雀。」

そう言って、スタスタ帰って行った。

「ちょ、ちょっと待ってよ！リボン！！あ、あのお邪魔しました
！！！」

礼をして走り去っていった。

「兄さん・・・っ。」

「僕に迷惑かけないんじゃないの？」

また僕を強く抱きしめる。

「痛いって・・・、兄さん・・・。」

「大丈夫だから、僕が守るから。」

僕のために、僕なんかのために、兄さんが傷つく。

「兄さあ・・・っ!ごめん・・・、ごめんね・・・。」

いつの間にか泣いていた。

怖い夢を見た子供のように――*

僕の弱さ

少し雲かかっている空を窓から眺めていた。
何をしてきたのだろう。

迷惑かけているのに、僕は何を変えてきたのだろう。
気持ちが沈んでいるときにクラスの声によって変わる。

「おおい！佐藤、呼んでいるぞ！！」

はぁ、煩いな・・・、てか誰だよ。僕を呼ぶ奴は。
空から目を放し、廊下の外を見る。

・・・沢田綱吉！

それに獄寺隼人に山本武・・・。
あいつら・・・何考えているの？
・・・落ち込んではいられない。
椅子から立ち上がり、ご指名通りそこまで行く。
と、その時。

「おい、お前ら邪魔なんだけだよあ？」

「てか、この小さいのダメツナじゃね？」

「うわぁ、まじでダメソーな顔してんじゃん？」

こっちのクラスの連中が綱吉達を囲む。

「てめえら、十代目のこと悪く言いやがって・・・!!」

「あんま達を侮辱するの、こっちも嫌だからな。」

その二人、獄寺と山本が前に出る。

クラスの奴と二人の間に火花がたっている。

綱吉はおどとしてその場から離れられない感じた。

本当にどうしてこんな奴を兄さんは気に入っているのだろう。

「ごめんね？沢田君、待った？」

とりあえず、顔を出してみる。

こんな格下の奴らなんて知るか。

一気にこっちに視線を向く。

「佐藤の連れなのか？」

「沢田君とは知り合いなんだー。喧嘩しちゃダメだよ？」

ニツコリして笑いかける。

ポツと鼻の下を伸ばして教室に入っていた。

なんで僕が笑うとみんな大人しくなるのか不思議なんだけどね。

「あつ、ありがとうございます。蓮弥さ……………」

「沢田君、帰ったほうがいいと思うよ？危ないと思うし。」

心配ありげに言う。

逆に兄さんの仕事が増えるのは面倒だからね。

「けつ、てめえなんかに言われる筋合いはねえよ。」

獄寺がこちらを睨む。

決して怖くないが、今が学校キャラだ。

わざと大きく体を震わせた。

「あつ…………ごめんね……。気をつけて……………」

「あの……、蓮弥さんに用が……………」

沢田の耳近くまで寄る。

「僕の機嫌のいいときに帰ってくれる？邪魔だから。」

周りの様子を見ながら小さくつぶやいた。
クスツと笑いながら、教室の中に入っていく。
戸惑いはありながら止めたりはしなかった。

「じゃあね、沢田君。」

手を振って自分の視界から外した。

大丈夫だったのかよーとか心配されながら、自分の席に戻る。
僕は自分が言った言葉に偽りだったと考える。

今、気分が悪いことはない。いたって普通な状態だ。

ただ、関わることを恐れた。

たったそれだけ。

卑怯者だよ、そうやって逃げるんだ。

先生が入ってくると、生徒らが席に着きだす。

授業が始まり静かになる。

僕は一応、真面目に聞いている。

少しつままないけど。

そうやって時が過ぎていき、授業は終わった。

次は体育か。

体育の加減って難しいんだよね。

走る時だって、速すぎても、遅すぎてもダメなんだよね。

とりあえず、更衣室に向かった。

「今日はドッチボールするぞ!!」

よっしゃー！！という声がいろんなところで聞こえる。
僕も心の中では叫びまくっていた。

避けるだけで終わるスポーツだから、下手に演技をしなくて済むからだ。

「一年の先生が休んでいるから、合同でするぞー！！」

「一年弱いじゃんー！！面倒くさー。」

「何？じゃあ、お前らが負けたら、放課後グラウンドの掃除だ。」

イラッときたのか、罰を出すことにした。

「はあ！！意味わかんねえし！！」

「一年もだからな！！」

いろいろな文句を言う奴がいたが気にしない。

そんな奴がいようと僕には関係がない。

対戦する一年の群れの方を軽く見ようとした。

が、軽く見るどころか、ギッと睨みつけることになる。

また沢田綱吉・・・！

どこまで僕の生活を邪魔すれば気が済むんだ・・・！
ずっと沢田のほうを睨みつける。

沢田のほうも顔を青くしてこっちを見ていた。

「おい、どうしたんだ。佐藤。」

僕の雰囲気からしていつもと違う感じがしたのか、そう言われた。

「う、ううん。なんでもないよ。」

笑ってごまかしたが、あいつへの怒りは収まらなかった。

僕をここまでしたんだから、ちよっとぐらい本気になっていいよね？
みんながコートの中に入り、背の高い奴が真ん中のセンターラインに並ぶ。

「ゲームスタート！」

先生がボールを高く上げる。

一年のほうが早く、ボールを取る。

比較的弱い奴を狙おうとして、僕を当てようと投げる。

いつもの僕なら、避ける。

だが、今は状況が違う。

バシッ

片手でもよかったが、両手で受け止めた。

それを、一年の誰かに投げた。

目標が的中して、ボールが相手の体に当たる。

クラスみんなは啞然としていた。

僕が避けて誰かが取るというのが通常だったから。

黙りすぎてもダメだと思い、適当に言葉を言った。

「あつ・・・、当たった・・・。」

そこから沈黙がとけ、喜びの声を上げる。

「やったじゃん！佐藤！！」

「見直したぜ！！」

僕の周りで叫びまくっていた。

それから言うもの、クラスの連中がどんどん当てていき、一年の数が減っていった。

獄寺は、沢田を庇い外野へ。

山本は、勢いすぎて三年の顔を当て、骨折させたため退場。

いよいよ、残り一人沢田となった。

沢田・・・君はどうするの？

逃げきれないよ、負ければ？

強気な微笑みを沢田にたいして向けた。

蓮弥とツナ

誰もが、三年の勝利だと思っていた。

ダメツナが勝てるはずないと・・・。

微かに銃発が聞こえた。

すると沢田が死んだように倒れていった。

・・・気絶？

そう思ったが、額に炎を燃やしながら立ち上がった。

「復活！！死ぬ気で蓮弥を倒す！！」
リボーン

つて、・・・僕？

ハハッ、笑いものだね。

昨日一発でやられた奴が僕に――

頬辺りに何かが通ったのか風が通過した。

「グハッ！」

僕の後ろにいた奴がボールに当たって気絶していた。

さっきまでのヘナチヨコが急に強くなったなんて考えられるわけ・・・

・つと！

あいつが投げってくるボールを避ける。

そのたんびに、後ろにいる奴が当たって退場になる。

負けると思っていた一年の奴らが応援をし始めた。

・・・つくそ！調子に乗りやがって！！

ボールを手に取り、投げるスピードも、力加減も強くした。
受け止めようとして骨は確実に折れるだろう。
自分の勝ちだと心の中で喜んでいた。

「死ぬ気で止める!!」

ちょっと馬鹿にしないでよ。

簡単に受け止められるはず――

ガシッ

片手で受け止めた・・・?

う、嘘だ・・・そんなはず・・・っ!

混乱していたため、ボールが来ることを忘れていた。

急いで顔を上げたために顔面に見事に当たった。

それと同時にメガネが壊れ、地面に落としてしまった。
痛がるふりして、自分の顔を隠した。

「お、おい!大丈夫かよ!!」

「痛むのか?保健室に行くか?」

クラスの心配する声。

だが、上を向けば僕のことをバレる。

どうしたらいいのかわからない・・・!!

「うおおおおおおお！！死ぬ気で守る！！」

ガバツと僕を“投げた”。

「えっ！？ちょー！！」

到着した場所は屋上だった。
授業中だったので、誰もいなかった。
あいつ、僕を庇ったのか？

蓮弥とツナ（後書き）

ああ、俺やつちやつたなあ。

雲雀さんの弟を屋上に投げつけたもんな・・・。

怒られるのは当然だけど、三年の圧力半端ねえ・・・。
結果一年が掃除することになった。

クラスの奴らは俺に責任を押し付けて帰っちゃうし。

獄寺君も山本も用事があつて帰っちゃったし。

（獄寺君の場合はビアンキさんが原因なんだけど。）

俺一人って言うのも大変だしなあ、サボろうか。

「何言っているの？サボったらどうなるかわかってんの？」

背中が震え、恐る恐る後ろを振り向く。

「えっ、蓮弥さん？」

「何？いちゃ悪いの？折角掃除手伝ってあげるって言つのに。」

せつせとトンボがけをしていく。
俺もやるう。

「今日のことありがとう。」

「えっ？」

体育のことかな・・・？

俺も咄嗟にしたことだから覚えていないけど。

「僕さ、極度の緊張感まで達するとき、何も考えられないんだよね。だから、助かった。」

かすかに微笑んでいた。

一瞬、戸惑った。

雲雀さんの兄弟だから笑わないと勝手に思い込んでいたから。

やっぱり双子だからといって性格は少し違うのかも。

「蓮弥、ボンゴレファミリーに入ってくれないか？」

急に現れたりボーン。

い、いつの間に・・・。

それに驚くことなく迷いなしで答える。

「いいよ。」

「えっ！！いいんですか！！」

「別に、雲雀さんも入っているしね。でも、あくまで雲雀さんの右

腕としてだから。」

やっぱり雲雀さんの弟だあ！！

「でも、仲良くしてあげてもいいよ。」

信じがたい言葉が飛んできた。

「えっ、今なんて・・・。」

「じゃあ、帰るから。」

スタスタ歩いていった。

掃除は綺麗にしてくれたようだ。

あっ、でもさっきの本当なのかな・・・？

俺の聞き間違い。うん、きっとそうだ。

蓮弥さんが急に振り向いた。

「またね、
“綱吉”。」

そう言った。

少しは信用してくれたのかな？
よく分からないけど嬉しいな♪

僕は君の事を信頼しているわけじゃない。

でも知り合いというところまで一緒にいてやるだけだから。
調子に乗るだけは止めなよ？

あの剣道馬鹿

僕は最近あいつのせいで苛立っている。
そう、あの剣道部野郎のせいで。

「蓮弥！！いい加減俺の剣道部に入れ！！」

僕の名前を気安く呼んでくる奴、持田剣介。
一応同じクラスで、剣道部主将の奴なのだが。
あいつが誘ってくるのは、マネージャーという仕事だ。
まだ、部員に入ってくれならわかる。
が、なぜそんなどうでもいいことをしなくてはいけない理由がわからない。

「僕・・・ほら、体力ないからみんなに迷惑かけちゃうし・・・それに・・・。」

「理由など関係ない！！入れ！！」

こいつ・・・僕が下手に出ているからって、調子に乗りやがって・・・！！

今、殴り飛ばしたいという気持ちでいっぱいだというのに！！

「あの・・・、蓮弥さんいますか？」

そこに運よく来てくれた、綱吉だった。
おお！！ナイス！よく来てくれた！！

「どうしたの、綱吉君？」

教室のドア辺りまで近づく。

「あつ・・・、今誰かと話してました？」

「気にしないでいいよ。で、何か用があるんでしょう？何？」

「今日、一緒に帰りませんか？俺・・・、一人なんで・・・。」

一人では寂しいというわけか。

いつもの僕だったら、嫌だ。と断っていただろう。

だが、一刻も早くあいつから離れたい。

「いいよ。帰ろう？」

にこやかに笑い、バッグだけ取って教室を出た。

あいつは引きとめようとしたのだが、クラスの奴らが呆れながら止めた。

「ありがとう、綱吉君」

「えっ・・・あつ、はい・・・。」

言われた理由がよくわからない様子だった。
まあ、そりゃそうだと思っただけだね。

次の日。

「おい、佐藤聞いたか？」

「何が？」

慌てて走ってきたクラスの一人の奴。
・・・何かあったっけ？

「持田が、ダメツナに勝負挑んだんだ！！」

「へえ・・・それが？」

「お前絡みなんだよ！！勝ったら、お前をすきに使うて言うんだよ！！」

はっ・・・？

ふざけてんだろ、あいつ・・・僕は僕のものだ！！

「あいつ、佐藤を何だと思っているんだ？」

「そうだよな、僕をもの扱いしたんだからね。」

目がつりあがり手に力を入れた。

「お・・・おい、佐藤？」

怒り狂っているのに気が付いたからか、怯えていた。

「わかつているよね、僕が言いたいこと。」

「えっ・・・あ、あいつのどこだよな。うん、こっちだから。」

指を指して廊下を走っていった。
絶対殺す・・・。

体育館。

今着いた時には勝負がついていた。
そっ、持田が勝っていた。

飛び跳ねて喜んでいるあいつに腹が立った。
それと、綱吉にも。

京子じゃなきゃ本気出さないってわけか？

「す、すみません・・・、負けるつもりじゃ・・・。」

「蓮弥!!」

謝っているところに割り込んだ持田。

「改めて言う。俺と付き合ってくれ。」

はあ!?

周りがざわめきだす。

「何言っているの？持田君？僕は男と付き合う理由なんてないよ。」

呆れた・・・。

こいつの目は真剣そのものだ。

だが、誰が男と付き合うものか!!

「俺はお前を男だと思ったことはない!女なんだろ?」

はっきり言った。

ピキッ

僕の堪忍袋の緒が切れた。

目の色を変え、あいつの襟元を掴んだ。

「誰が女だとあ？」

「いや、お前が・・・っ!!」

何かであいつを殴り飛ばした。

そう、愛用のトンファ―を取り出していた。
周りがまた煩くなる。

「あれって、雲雀さんの・・・。」

「いや、違うだろ??だって、あいつだぜ?」

「でも・・・、今のあいつ怖くね?」

疑いだす声など聞こえなかった。
女だと言ったあいつが許せなかったから。

いつもの猫かぶりをはずした。

「てめえ・・・、わかってんだろ？僕が男だって知ってるだろ・・・？」

あいつが飛んでいった方向に歩み寄った。

「れ、蓮弥・・・、止める！！」

「僕の名前を呼ぶな。呼んでいいのはひばっ——」

後ろから口を塞がれた。

もがきながら、背後を見た。

「っ・・・？」

後ろには綱吉がいたのだ。

いいところだったのに・・・。

「だ、ダメですって！！その言葉言つては！！」

・・・その言葉？

今、なんて言おうとした？

『僕の名前を呼ぶな。呼んでもいいのは雲雀恭弥だ！！』

っあー！

もがくのを止めた。

雲雀の名を出せば騒がれることは確かだ。

だから綱吉は……。

怒りを抑え、落ち着かせた。

「ありがとう、綱吉君。止めてくれて……。」

「い、いえ……。」

目をそらし、下を向いた。

肩が震えるところを見ると、怖かったんだろうな。

雲雀恭弥の弟だから。

周囲を見渡すと、ヒソヒソと何かを話している人がいた。

何に注目しているのかわかった。

……僕、知らず知らずのうちにトンファー出していたんだ。

どうしようかな……。

考えていた時、あいつが腰を抜かしながら立ち去ろうとしていた。

キツと牙を見せ、腹を足で踏みつけるかのように押さえた。

「ぐおっ……！！」

叫び声と共に恐怖で見つめていた。
本当に見掛け倒しの野郎だな・・・。

「僕が女かどうか、聞いてきたよね？」

自分のカッターシャツに手をかけ、力技で破った。
あつと驚く声。

いつものひ弱な僕では考えつかないような体つきだから。
自分で言うのもなんだが、毎日鍛えているつもりだ。
誰にも負けないように、必死にね。

「これでいい？僕が男だっていうこと。わかったでしょ。」

周りがぼかーんとしている中、無駄なことをしたなど。
こんなところに行かずに、教室に向かえばよかったものを・・・。
また、綱吉のせい・・・か。
破ったカッターシャツを持ち、立ち去った。
その後、綱吉が追いかけてきた。

「何？まだ用があるの？」

「あつ・・・あの、すみません。巻き込んだじゃいまして・・・。」

そんなことかと溜息をもらす。

きつと、君が巻き込まれたんだと思うけどね。

「それだけ？なら、帰るよ。」

「い、いえ・・・待ってください！あの・・・俺の予備のシャツ貸します！！よく、服が破れるから、持ってきていて・・・。どうですか？」

おどおどしながら尋ねてきた。

少しでも償いのつもりなのかな・・・。

「気持ちだけ、受け取っておくよ。」

微笑みながらまた歩いていった。

だって、どうせ着たって入らないと思うからね。

応接室に行つて、もらつてこうようか。

確かあつた気がするけど・・・、兄さんに迷惑かけたりしないかな・・・。

ああ・・・、僕の馬鹿あああああ！！！！

あの剣道馬鹿（後書き）

後日。

佐藤蓮弥の所持していたトンファーは偶然廊下で拾ったものとされた。

放課後、それを届けに行ったと記された。

佐藤蓮弥は実は空手道場に通っていたことが判明された。

持田剣介に関しては、佐藤蓮弥のことは軽い冗談で言ったことだとされた。

佐藤蓮弥に近づかないようになった。

並盛通信より。

「なんだー、そういうことかー。」

「変だと思ったんだよねー。だって、あの佐藤がねー。」

「言えばいいのによー、佐藤！」

「あ、ははは・・・、言うことないかなって・・・ね。」

完全に不自然すぎるだろ！！

絶対に兄さんの仕業だあああああああ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7091n/>

ココロ曇り空

2011年10月7日22時29分発行